

氏名（本籍）	伊藤 仁美（神奈川県）
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博甲第56号
学位授与年月日	令和5年3月15日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当 音楽文化研究科 音楽専攻
論文題目	幼稚園教育要領領域「音楽リズム」の成立と展開に関する研究 ーリトミックとの関係を中心にー
論文審査委員	主査 教授 八木 正一 副査 教授 高松 晃子 副査 教授 山本 まり子

### 論文内容の要旨

本論文の研究目的は、幼稚園教育要領領域における「音楽リズム」の歴史とリトミックがどのような関わりをもっていたのかを明らかにすることである。

1956（昭和31）年、幼稚園教育要領が告示され領域「音楽リズム」が成立した。その背景にはそれまでの「遊戯」とは異なる、幼児の自由な表現を重んじるねらいがあった。当時文部省青少年教育課長として作成に携わった坂元彦太郎によれば、幼児のリズム教育を大きく変えるため、領域名に「遊戯」ではなく、新しい名称を付することにしたとされる（1964: 29-30）。新名称の候補の一つとしてリトミックが挙げられたが、特定の教育方法を指すという理由で見送られた。検討の結果、幼稚園教育要領の前身である「保育要領」項目にある「音楽」と「リズム」を繋げて「音楽リズム」という造語をつくり、それまでの幼児のリズム教育を一新させようとした。

1964（昭和39）年、領域の枠組みを踏襲しつつ幼稚園教育要領の改訂がなされた。以後、領域「音楽リズム」は検討を重ねながら33年間継続することとなった。1989（平成元）年の幼稚園教育要領の改訂で「音楽リズム」は廃止となり、領域「表現」が設置され現在に至っている。名須川知子は領域「音楽リズム」の時代、それまで主流であった唱歌遊戯等に代

わり、リトミック、コダーイシステム、オルフシステム等の海外の音楽教育方法や幼児の自由表現活動が多く実践されてきた、と述べている（名須川 2004: 1）。

本論文の問いは、領域「音楽リズム」とリトミックとの親和性とは何か、「音楽リズム」の成立と展開に関してリトミックがどう関わっていたか、という点である。リトミックはスイスの作曲家・音楽教育家のエミール・ジャック＝ダルクローズ（1865～1950、以下ジャック＝ダルクローズと記す）が創案した音楽教育方法で、その目的は、動きの体験を通して音楽感覚や心身の調和を促すことにある。領域「音楽リズム」の時代、日本の幼児音楽教育へのリトミック導入に広く影響を及ぼした人物に、小林宗作（1893～1963）と板野平（1928～2009）が挙げられる。小林はリトミック研究の為に留学を経て、日本リトミック協会を創立した。1950（昭和 25）年、小林はリトミックに重きを置いた国立音楽大学附属幼稚園の初代園長に就任した。一方の板野も留学から帰国後、1956（昭和 31）年、国立音楽大学講師に就任し、リトミック普及のため精力的に執筆や講座の開催、後進の指導等に当たった。小林と板野はジャック＝ダルクローズの文献を多数翻訳し、さらに幼児のリトミック指導書も数多く執筆した。領域「音楽リズム」の時代、この2人はリトミックによる幼児のリズム教育方法を模索し、普及に尽力していたことが窺える。そこで本研究では、幼稚園教育要領領域「音楽リズム」とリトミックの関係を、①領域「音楽リズム」の歴史と変遷、②リトミックを展開した小林と板野の功績、の2つの視点からリトミックがこの時代の「音楽リズム」の指導のあり方に影響を与えたことを明らかにした。

第1章ではリズム教育としてのリトミックとその受容過程について検証した。まずリトミックについて、その基本概念である「内的聴覚」を中心にしつつ概観した。筆者は「内的聴覚」を2つの側面、つまり①物理的な感覚器官として機能する聴覚、②音楽がもたらす思考を感じ取る心の耳としての聴覚、として位置づけその重要性を明らかにした。次にそれを踏まえ芸術表現の基礎訓練としてのリトミック移入過程を辿った。1906（明治 39）年の二代目市川左團次の欧州演劇視察をきっかけに、リトミックが俳優教育の基礎訓練として移入され、その後舞踊家の伊藤道郎、体育教師の天野蝶らが、それぞれの専門分野とリトミックを結び付けながらその分野での先駆的な役割を果たした。また、幼児教育者としてリトミックを重視した小林宗作の教育観についても検証をおこなった。その中で、小林がリズムによって幼児教育を展開することの重要性を説き、領域「音楽リズム」の時代、リトミックとリトミックを基盤にした「総合リズム教育」を提案したことを明らかにした。

第2章では、幼児のリズム教育としてリトミックがどのように展開されていったのかを検討した。1962（昭和 37）年、リトミック教育研究機関として国立音楽大学に教育音楽学科第Ⅱ類が設立され、これによりリトミックが普及、展開することとなった。第Ⅱ類の設立契機は、板野が中学校音楽にリトミックを提起した文部省実験研究「音楽反応の指導」への反響と、東京都私立幼稚園協会の研究発表にてリトミックが大きな共感を得たことにあった。1982（昭和 57）年、第Ⅱ類は設立 20 周年を迎え、卒業生は 1600 名余りを数えた。卒業生の就職先は、9.68%が保育者養成校、36.2%が学校教員、24.7%が音楽教室であった。

それらリトミックを専門に学んだ卒業生はそれぞれの就職先で、リトミックによる音楽実践を展開していった。また、本章では1960（昭和35）年刊行の『子供のためのリトミック』（小林、板野共著）を分析した。本文献は戦後初めての本格的なリトミック指導書である。リトミックの指導法を分かりやすく伝え、現場で実践できるような具体的事例が豊富に記載された指導書であることが明らかになった。本書は、リズム教育としてのリトミックの展開に大きな役割を果たすこととなった。

第3章では、領域「音楽リズム」の成立と変遷を考察した。1956（昭和31）年告示の幼稚園教育要領では、発達段階に配慮しながら、幼児自らが音楽に関わろうとする視点を基礎とし、望ましい経験として4つの項目が示された。その1つに「動きのリズムで表現する」が設定された。この「動きのリズム」では、歩く、走る等のリズム的な動きを通して音楽リズムの活動を行うことが提示された。1964（昭和39）年に改訂された幼稚園教育要領では、「動きのリズム」を踏襲しつつ、のびのびと楽しみながら表現する、という方針が打ち出された。さらに具体的な実践方法がより詳細に示され、「動きのリズム」における歩く、走る等のリズムカルな活動を、集団で共有する観点が加わったことを明らかにした。つまり、領域「音楽リズム」に「動きのリズムで表現する」が加わったことにより、リトミックに一層の関心が寄せられ、逆にリトミックも「音楽リズム」を意識し、その実践方法に工夫をおこなうこととなった。

第4章では、幼稚園教育要領領域「音楽リズム」に対するリトミックの影響を、①受容期（1950年頃～1960年頃）、②展開期（1960年頃～1971年頃）、③定着期（1971年頃～1988年頃）の3期に分けて検証した。①のリトミック受容期における主な出来事は、1953（昭和28）年の『指導書領域音楽リズム』（文部省編）刊行と、1956（昭和31）年の幼稚園教育要領告示による領域「音楽リズム」の成立である。受容期を主導した小林は、幼児教育にリズム教育が位置づけられた意義を認めつつ、さらに現場での実践力向上のために尽力した。②のリトミック展開期には、全国にリトミックを普及することとなった国立音楽大学教育音楽学科第Ⅱ類が開設された。さらに、幼児教育雑誌『幼児と保育』におけるリトミック実践の掲載、リトミック教育映画の制作および講習会での上映、東京オリンピックのイベントでのリトミック発表、NHK ラジオ音楽教室におけるリトミックの発信等、板野らはさまざまな媒体を通じてリトミックを広めていった。③のリトミック定着期には、領域「音楽リズム」が幼児教育現場に一層浸透していくこととなった。たとえば、この時期（1981年）に刊行された『幼児保育百年の歩み』（日本保育学会編）では、「小林宗作によってダルクローズのリトミックが我が国に導入され、律動遊戯にかかわって全国幼稚園界に浸透していった」と記されている（日本保育学会編 1981: 97）。また、久保田芳枝は、幼児のリズム教育を全てリトミックと呼ぶような当時の風潮を批判しているが、逆に言えばそれほどリトミック、あるいはリトミック的な活動が幼児教育現場で主流になっていたことを物語っている（久保田 1973: 58）。

以上の考察から、領域「音楽リズム」とリトミックが互いに影響し合い、そこには深い相

関関係があったと結論付けることができる。リトミックは「音楽リズム」の時代、社会的に浸透し、幼児教育現場、保育者養成、音楽教室等で幅広く普及した。その要因は領域「音楽リズム」に「動きのリズムで表現する」という観点が加わり、「音楽リズム」とリトミックの関係が密接になったところにある。つまり「音楽リズム」が成立し定着したことによってリトミックの普及が促され、また「音楽リズム」の指導もリトミックから大きな影響を受けることとなった。こうしたリトミックと「音楽リズム」の相関形成の背景には、小林と板野の功績があることも本論で述べた通りである。

## 博士論文等審査の要旨

審査委員会は、「課程博士の学位論文審査等に関する内規」第15条に基づいて博士論文等の審査を下記のように実施した。

音楽文化研究科博士後期課程3年次生伊藤仁美氏による博士論文「幼稚園教育要領領域「音楽リズム」の成立と展開に関する研究ーリトミックとの関係を中心にー」（令和4年12月2日提出）について、令和5年1月31日に公開試問及び最終試験が行われた。その審査について報告する。

この研究の目的は、幼稚園教育要領における領域「音楽リズム」の歴史とリトミックがどのようなかかわりをもっていたのかを明らかにする点にある。領域「音楽リズム」は1956（昭和31）年告示の幼稚園教育要領で新設され、1989（平成元）年の改訂まで教育要領で示されていた領域である。本研究は、この領域「音楽リズム」の成立や定着の過程でリトミックの普及が促され、そのことによって「音楽リズム」の指導もリトミックから大きな影響を受けることとなった点を、史資料の分析を通して明らかにしている。そしてこの背景に、リトミック教育を推進した小林宗作と板野平の活動が大きくかかわっていることも明らかにしている。

本論文は、4章から構成されている。

第1章では、エミール・ジャック＝ダルクローズによるリトミックの概観とわが国への受容過程について整理している。また本章では、リトミック教育に深くかかわった小林宗作の教育観の分析を通して、小林と領域「音楽リズム」の成立とのかかわりについても検討を行っている。続く第2章では、幼児のリズム教育としてリトミックがどのように展開されていたのかを検証している。とくに、リトミック教育研究機関としての国立音楽大学教育音楽学科Ⅱ類の設立（1962年）や、小林、板野による初めてのリトミック指導書『子供のためのリトミック』を分析し、それらがリズム教育としてのリトミックの展開に大きな役割を果たしたことを論じている。

第3章では、領域「音楽リズム」の成立と変遷について考察を行っている。とりわけ1964（昭和39）年に改訂された幼稚園教育要領において、動きのリズムに加えて、のびのびと楽しみながら表現するという方針が打ち出されたのを契機にして、リトミックに一層の関心が寄せられることとなった。これにより、逆にリトミックも「音楽リズム」を意識し、実践方法の工夫を行うようになったことを明らかにしている。

第4章では、幼稚園教育要領領域「音楽リズム」に対するリトミックの影響を、①リトミックの受容期（1950年～1960年）、②展開期（1960年～1971年）、③定着期（1971年～1988年）の3期に分け、史資料に基づいて詳細に検証している。とくに③のリトミック定着期には、領域「音楽リズム」をも意識した板野の多方面に亘る教育、研究、普及活動によってリトミックが幼児教育現場に一層浸透していき、それが領域「音楽リズム」の内容に大きな影響を与えた点を明らかにしている。これらから、領域「音楽リズム」とリトミックが

互いに影響し合い、そこに深い相関関係が生まれたと結論づけている。そしてその相関の背景には、リトミック教育指導者である小林と板野の活動があったことも検証している。

領域「音楽リズム」とリトミックについては、両者に親和性があるのではないかと一般的には考えられている。しかし、それを論証した研究はない。本研究の第一の意義は、この両者の関係を、相互に影響を与えたという視点で動的にとらえなおし、関連する史資料の詳細な分析からそれを論証したことにある。さらに本研究は保育現場や幼児の音楽指導の分野におけるリトミックに関する一次史料を発掘し、新たなリトミック研究にもさまざまな視点を提供するものとなっている。

こうした点を評価し、当審査委員会は全員一致で、本論文が申請者に対して博士（音楽）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

## 試問の結果の要旨

審査委員会は、「課程博士の学位論文審査等に関する内規」第15条に基づいて博士論文等の審査を下記のとおり実施した。

音楽文化研究科博士後期課程3年次生、伊藤仁美氏の博士学位論文公開試問の結果について報告する。公開試問は、令和5年1月31日、10時30分より、2201教室で行われた。論文執筆者による発表20分、試問担当者による試問と傍聴者からの質問に20分という形で行われた。その後、審査員は、伊藤氏に対する最終試験を実施した。

発表では、適切に準備されたスライドを用いて学位論文の全体がわかりやすく提示された。試問では、いずれの質問に対しても適切に応答がなされた。最終試験では、リトミック教育推進者の板野平の活動や領域「音楽リズム」とリトミック教育の親和性について質問がなされた。質問に対しては、論文の内容をふまえ適切な応答が行われた。同時に、リトミックに関する氏の理解の深さも示され、研究の課題や今後の展開についても明確になっていることが確認できた。

以上の結果、研究者としての資質と態度とが十分に備わっていることが確認できた。これにより、試問担当者全員一致で合格と判断した。